

道成寺

田辺に出てから、海岸線を北上し、日高川を超えると、日高の郷に入る。そこに道成寺がある。

道成寺は、紀伊の国で、もともと大きな寺院だ。

二一八年前……文武天皇の後であった宮子姫が両親のために、建立したのが……この道成寺だと……安珍は聞いている。

清次達が、安珍を探している……と聞いたのは……安珍が、この道成寺の宿坊に泊まっている時の事だ。

この道成寺でも、安珍は、何度か……法具の注文や貴金属の供給などを行っている……そのため、融通が利いた……。

安珍は、昼間、泊まり客のいない頃を見計らって……宿坊を借り……清次達とあった。

清次は、郷の若い面々を……十人程、連れて来ている。

いずれも、安珍の顔なじみの者ばかりだ……が……その物達の顔が険しい……怒気を含んでいる……。ただ、清次の表情だけは……憔悴したように……青白い。

安珍は、真砂の者達が、自分が真砂の地に立ち寄らなかった事を怒っているのだと思った。……特に……清姫は、どんなに怒っている事だろう……。

だが……清次が、こんな、憔悴しきった顔をしているのは、不可解だった……。

……自分の気持ち、清姫に伝わるだろうか？……理解してもらえないかどうかわからないが……清次だけには……自分の気持ちを、正直に伝えておかなくてはいけない……と、安珍は考えていた。

席につくと……清次は、安珍に向かって、固い表情で……頭を下げた。

「お休みのところ、お呼び立てして、申し訳ございません……実は、安珍殿に、早急に、お耳に入れたい事があり……父の名代として……こうして、まかり来ました……。」

安珍は、拍子抜けをした……どうも、思う事と態度が違っている。……しかし、なんだろう？……清次の言葉が……固すぎる。

「安珍殿……妹が死に申した……。」

えっ……安珍は、耳をうたがう……。

「今……何と……。」